

第5節 時期不明の遺構

出土遺物がなく、埋土の状況や検出面などでは時期を特定することができない遺構について、時期不明の遺構として扱う。このうち、掘立柱建物跡については、柱の規模と配置などから弥生時代に帰属することも推定されるが、明確ではないため、本節にて述べる。

1 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡 1 (第69図 表7 巻頭図版2 PL.32)

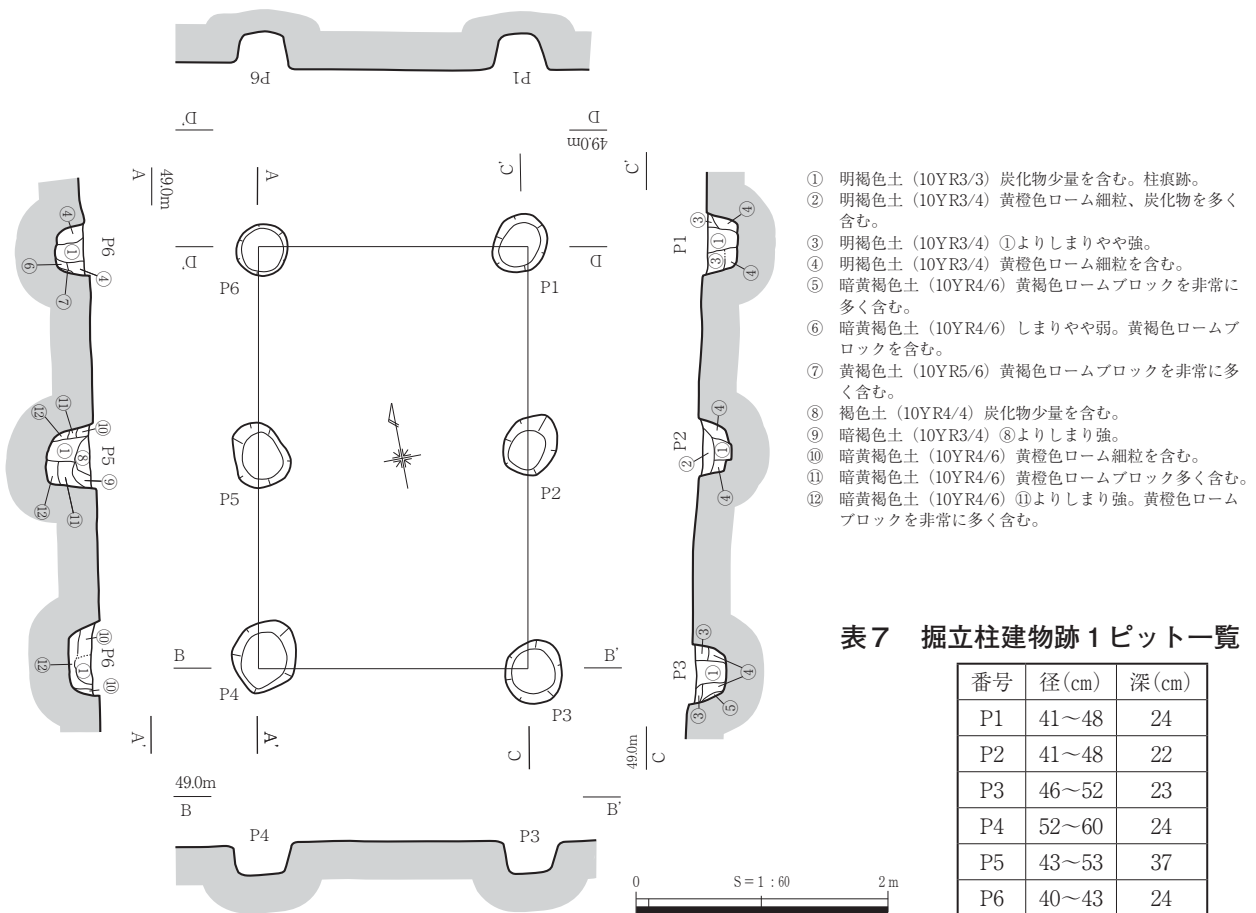
M3グリッドにあたり、標高47.6mの傾斜地に位置する。桁行2間(3.15m)、梁行1間(2.12m)の掘立柱建物跡である。

平面積は6.68㎡で、主軸はN-10°-W。柱穴掘方の規模は直径0.4~0.5m、深さ0.3~0.4mで、柱痕跡の幅は15~20cm。遺物は出土していないが、柱穴の規模と配置などから、弥生時代に帰属する可能性がある。

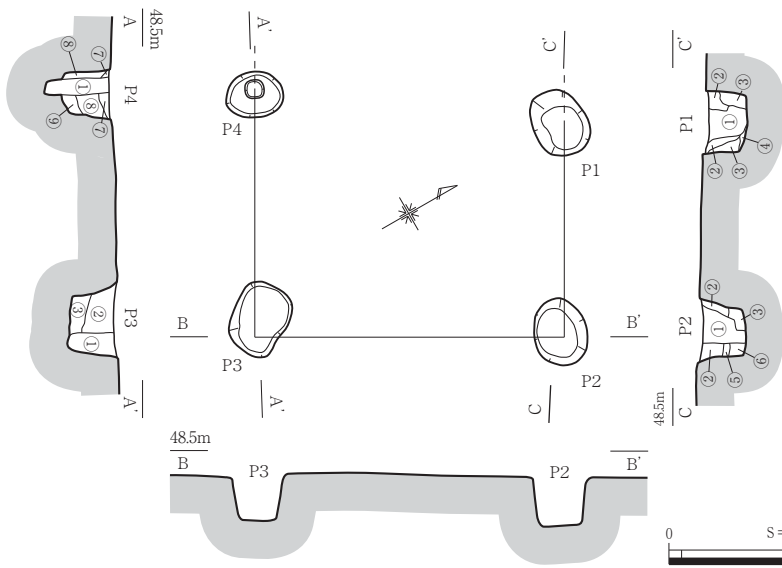
掘立柱建物跡 2 (第70図 表8 巻頭図版2 PL.32)

N3グリッドにあたり、標高48.35mの傾斜地に位置する。桁行1間以上(柱間約1.8~2.0m)、梁行1間(柱間約2.46m)の掘立柱建物跡である。

平面積は4.51㎡以上で、主軸はN-60°-E。柱穴掘方の規模は直径0.4~0.5m、深さ0.3~0.5mで、柱痕跡の幅は15~20cm。遺物は出土していないが、柱穴の規模と配置などから、弥生時代に帰属する



第69図 掘立柱建物跡 1

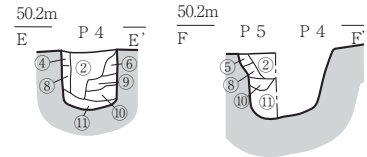
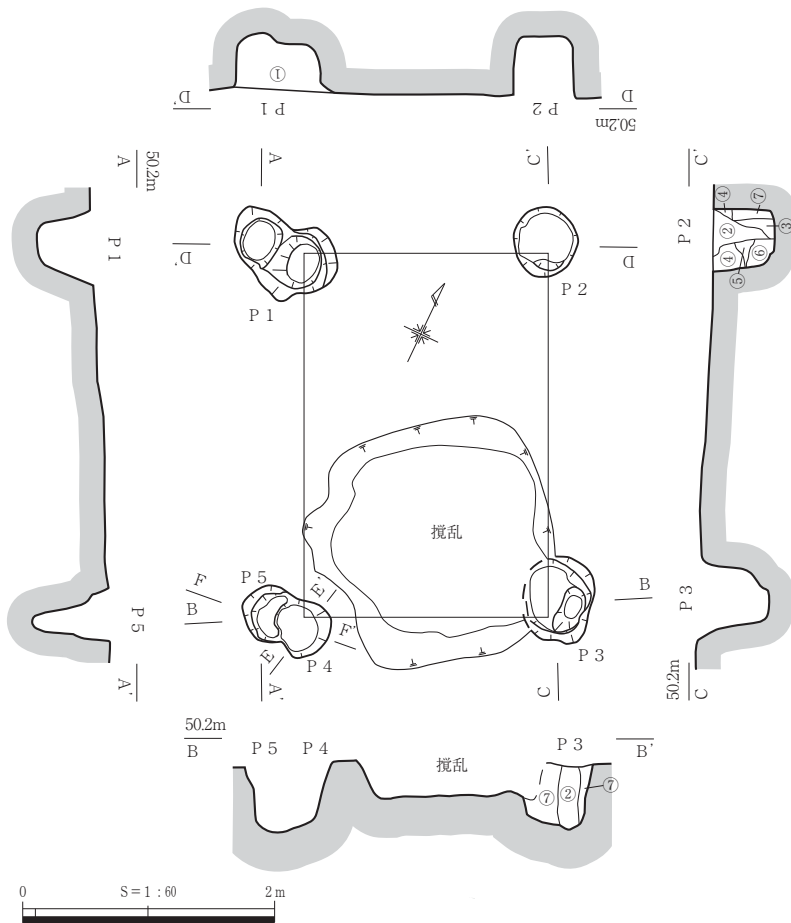


- ①暗褐色土 (10YR3/3) 炭化物少量を含む。柱痕跡。
- ②暗褐色土 (10YR3/4) 黄橙色ローム細粒を含む。
- ③暗黄褐色土 (10YR4/6) 黄橙色ロームブロックを含む。
- ④黄褐色土 (10YR5/6) 黄褐色ロームブロックを非常に多く含む。
- ⑤暗黄褐色土 (10YR5/6) 黄褐色ローム細粒を密に含む。
- ⑥暗褐色土 (10YR3/3) しまりやや強。
- ⑦暗黄褐色土 (10YR4/6) 黄褐色ロームブロックを多く含む。
- ⑧暗黄褐色土 (10YR4/6) ⑦よりしまり弱。
- ⑨暗褐色土 (10YR3/3) 黒褐色ロームブロックを含む。

表8 掘立柱建物跡2ピット一覧

番号	径(cm)	深(cm)
P1	43~53	36
P2	43~55	36
P3	45~58	39
P4	37~46	52

第70図 掘立柱建物跡2



- ①黒褐色土 (10YR2/3) しまりあり。粘性あり。径1cm大のロームブロックを含む。炭化物をわずかに含む。
- ②黒褐色土 (10YR2/3) しまりややあり。粘性あり。径1cm大のロームブロックを含む。炭化物わずかに含む。
- ③暗褐色土 (10YR3/3) しまりあり。粘性あり。径2cm以下のロームブロックをやや多く含む。
- ④黒褐色土 (10YR2/2) しまりあり。粘性あり。径2cm以下のロームブロックを多く含む。
- ⑤黒褐色土 (10YR2/2) しまりあり。粘性あり。径1cm以下のロームブロックを少量含む。
- ⑥暗褐色土 (10YR3/3) しまりあり。粘性あり。径5cm以下のロームブロック非常に多く含む。
- ⑦暗褐色土 (10YR3/4) しまりあり。粘性あり。径3cm以下のロームブロック非常に多く含む。
- ⑧黒褐色土 (10YR2/3) しまりあり。粘性あり。径5mm以下のローム粒をわずかに含む。
- ⑨暗褐色土 (10YR3/4) しまりあり。粘性あり。径3cm以下のロームブロックを多く含む。
- ⑩黒褐色土 (10YR2/2) しまりあり。粘性あり。径1cm以下のロームブロックをやや多く含む。
- ⑪黒褐色土 (10YR2/3) しまりあり。粘性やや強い。径3cm以下のロームブロックを非常に多く含む。

表9 掘立柱建物跡3ピット一覧

番号	径(cm)	深(cm)
P1	28~32	35
P2	31~33	22
P3	26~42	30
P4	38~50	54
P5	43~50	12
P6	33~45	44

第71図 掘立柱建物跡3

可能性がある。

掘立柱建物跡3 (第71図 表9 PL.32)

F 2～F 3、G 3グリッド、標高およそ49.8～50.0mの緩斜面に位置する。当初は単体のピットとして調査していたが、攪乱に切られたP3が新たに検出されたことで、掘立柱建物跡として調査した。桁行1間(3.24m)、梁行1間(2.0m)の掘立柱建物跡である。

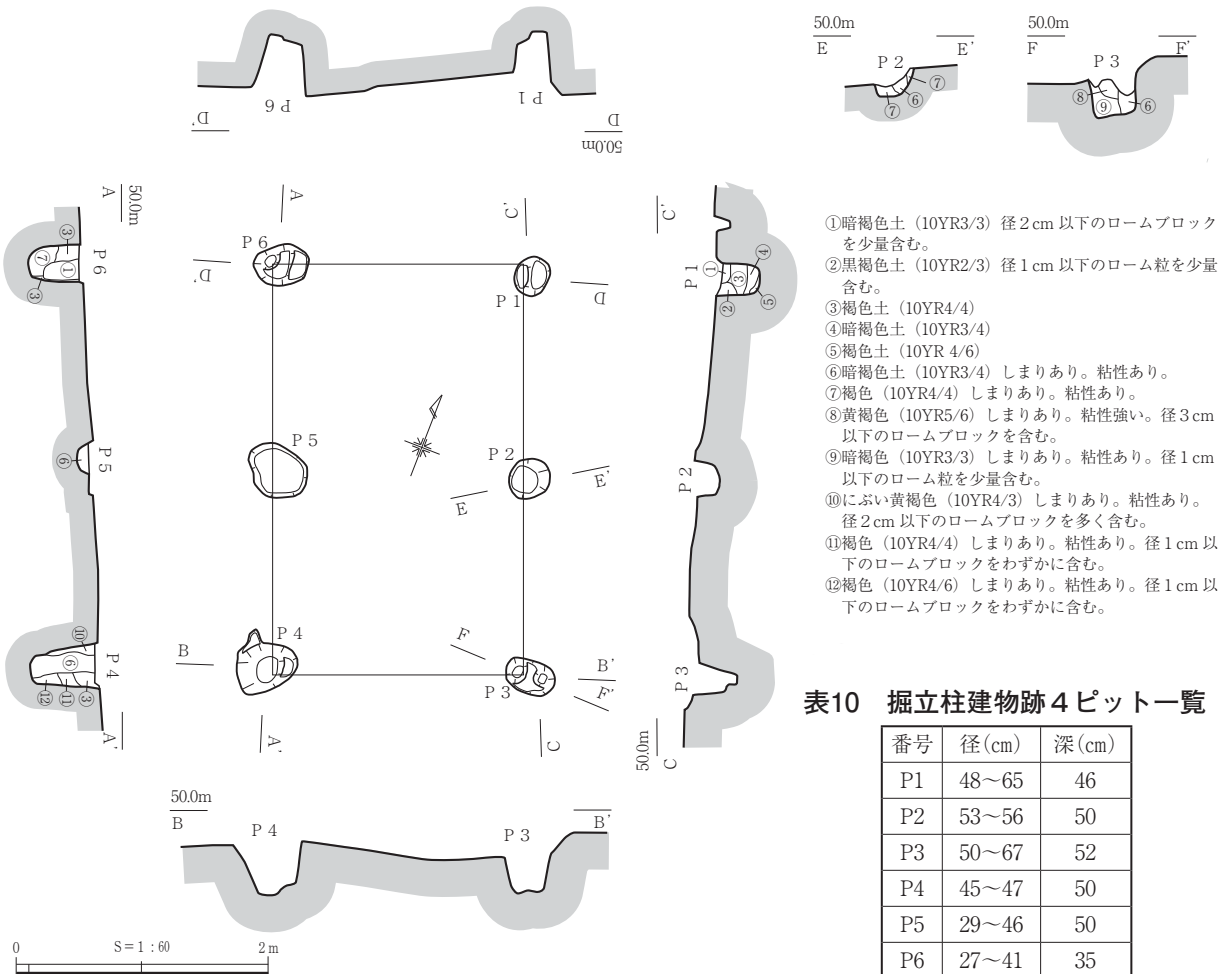
平面積は約6.5㎡、主軸はN-31°-Wを測る。柱穴の底面レベルはおよそ49.4～49.5mであり大きな差は認められない。P1はその形状から柱の建て替えが行われた可能性が高いが、埋土からは、それが確認できなかった。P3の断面では柱の痕跡を確認できた。

P1からは弥生土器と考えられる土器小片が出土した。

掘立柱建物跡4 (第72図 表10 PL.32)

E 1グリッド西側にあたり、標高49.6～49.8mの緩斜面に位置する。桁行2間(3.25m)、梁行1間(2.0m)の掘立柱建物跡である。

平面積は6.5㎡、主軸はN-21°-Wを測る。P 2とP 5を除く柱穴の底面レベルはおよそ49.2～49.3mであり大きな差は認められない。柱穴の掘方の規模は直径0.29～0.50m、最大の深さ0.46mを測る。P 4、P 6では柱痕を確認したが、P 1、P 3では柱痕は確認できなかった。P 2とP 5は掘り



第72図 掘立柱建物跡4

方が浅く、補助的な柱であろう。

遺物は出土していないが、柱穴の規模と配置などから、弥生時代に帰属する可能性がある。

2 土坑

土坑43(第73図 PL.30)

O3グリッドの中央南端にあたり、標高48.1mの傾斜地に位置する。

径約1.37mの平面形が円形で、断面形が方形を呈する土坑である。検出面から土坑底面までの深さは0.67mを測る。埋土は17層に分層できた。黄褐色土を主体とする。

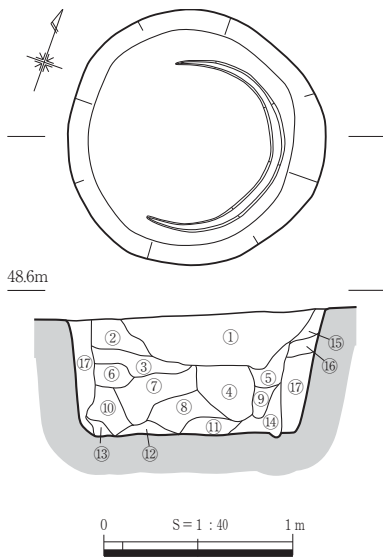
遺物は出土していないため詳細な時期比定には至らないが、土坑底面には半円形にめぐる周溝を桶形棺の痕跡と考えられることから、近世～近現代に帰属する埋墓であると考えられる。

土坑44(第74図 PL.31)

J2グリッドの中央西端、標高48.7mの緩斜面に位置する。東側を竪穴住居跡4の掘り方で掘削されている。

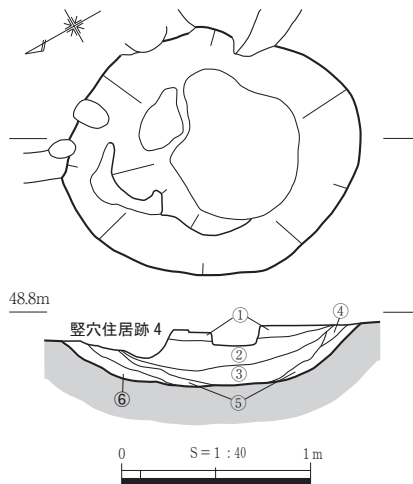
平面形は円形で、径1.31～1.60mを測り、断面形は緩やかな船底状を呈する。遺構上部は後世の攪乱により失われている。検出面から土坑底面までの深さは0.31mを測る。底面に木の根の攪乱を検出した。埋土は6層に分けられ、黒褐色土を主体とする。中心に向かい堆積していることから、自然堆積と考えられる。

遺物は出土しておらず、時期は竪穴住居跡4を遡る。性格は不明である。



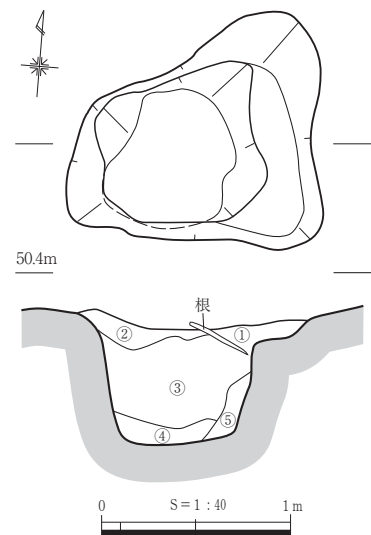
- ① 灰褐色土 黄褐色ロームブロックを含む。
- ② 灰褐色土 黄褐色ロームブロックを多く含む。
- ③ 暗黄褐色土 黄褐色ロームブロックを多く含む。
- ④ 暗褐色土 黄褐色ロームブロック、黒褐色シルトブロックを含む。
- ⑤ 黄褐色土 黄褐色ロームブロックを多く含む。
- ⑥ 暗褐色土 黄褐色ロームブロックを多く含む。
- ⑦ 黄褐色土 黄褐色ロームブロックを多く含む。
- ⑧ 黄褐色土 黄褐色ロームブロックを含む。
- ⑨ 黒褐色土 黄褐色ロームブロックを含む。
- ⑩ 暗褐色土 黄褐色ロームブロックを含む。
- ⑪ 淡黄褐色土 黄褐色ロームブロックを非常に多く含む。
- ⑫ 暗褐色土 黄褐色ロームブロックを多く含む。
- ⑬ 黄褐色土 黄褐色ロームブロックを非常に多く含む。
- ⑭ 暗黄褐色土 黄褐色ロームブロックを多く含む。
- ⑮ 淡黄褐色土 黄褐色ロームブロックを非常に多く含む。
- ⑯ 暗黄褐色土 黄褐色ローム細粒を含む。
- ⑰ 淡橙色土 淡橙色ロームブロックを非常に多く含む。

第73図 土坑43



- ① 褐色土 (10YR4/1) ややしる。粘性なし。径1cm以下の明黄褐色土 (10YR7/6) ブロックをわずかに含む。
- ② 黒褐色土 (10YR3/1) ややしる。粘性なし。
- ③ 黒褐色土 (10YR3/1) しまりなし。粘性なし。混入物なし。
- ④ におい黄褐色土 (10YR5/4) ややしる。粘性なし。黒褐色土をわずかに含む。
- ⑤ 明黄褐色土 (10YR7/6) と黒褐色土 (10YR3/1) が混じる。しまりなし。粘性なし。
- ⑥ 明黄褐色土 (10YR7/6) と黄褐色土 (10YR8/6) が混じる。

第74図 土坑44



- ① 褐色土 (10YR4/4) しまりなし。粘性なし。
- ② 暗褐色土 (10YR2/2) しまりあり。粘性なし。
- ③ 黒色土 (10YR7/1) しまりあり。粘性なし。
- ④ 黒色土 (10YR7/1) しまりあり。粘性あり。
- ⑤ 黒褐色土 (10YR2/2) しまりあり。粘性あり。

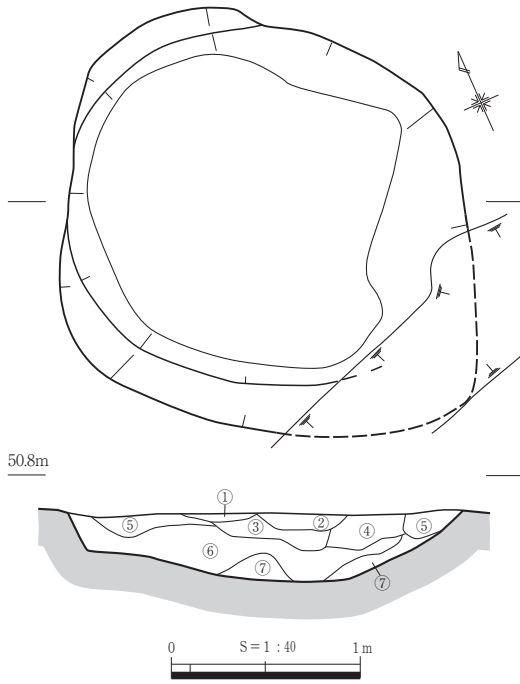
第75図 土坑45

土坑45(第75図 PL.31)

C 2グリッドの中央北、標高50.2mの緩斜面に位置する。表土除去後、Ⅲ層上面で不整形の褐色土の広がりを検出した。

長軸1.59m、短軸0.91mを測る平面形が不整形の土坑である。遺構上面は木の根による攪乱が著しい。検出面から土坑底面までの深さは0.71mを測る。埋土は5層に分けられ、黒色土を主体とする。

遺物は出土しておらず、時期および性格は不明である。



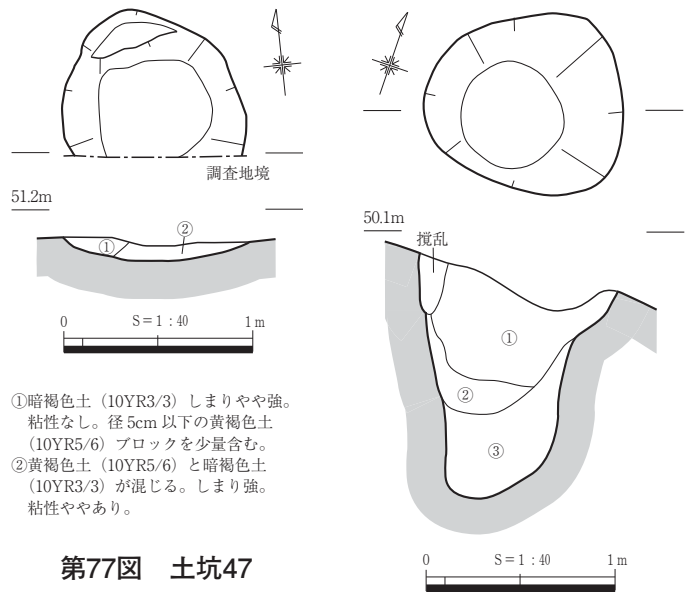
- ①灰褐色土 (10YR4/1) しまりやや弱。粘性やや弱。焼土粒を含む。
- ②明褐色土 (7.5YR5/6) しまりなし。粘性なし。径2mm以下のAT粒を含む。
- ③黄褐色土 (10YR5/6) しまり強。粘性やや弱。径2mm以下のAT粒を含む。
- ④にぶい黄褐色土 (10YR5/4) しまり強。粘性やや弱。径1cm以下の地山粒、黒色土粒を含む。
- ⑤灰褐色土 (10YR4/1) しまり弱。粘性やや弱。径1cm以下のAT粒を含む。
- ⑥にぶい黄褐色土 (10YR4/3) しまり強。粘性やや弱。径3cm以下のAT粒、径2cm以下の地山粒、黒色土粒を含む。
- ⑦黄褐色土 (10YR5/6) しまり強。粘性中。径1cm以下の地山粒を含む。

第76図 土坑46

土坑46(第76図 PL.31)

D 3グリッドの中央東端、標高50.6mの緩斜面に位置する。表土除去後、Ⅲ層上面で褐色系の土の広がりとして検出した。

平面形は径2.08~2.11mの円形を呈する。断面形は皿状を呈し、遺構上部は後世の攪乱により失われている



- ①暗褐色土 (10YR3/3) しまりやや強。粘性なし。径5cm以下の黄褐色土 (10YR5/6) ブロックを少量含む。
- ②黄褐色土 (10YR5/6) と暗褐色土 (10YR3/3) が混じる。しまり強。粘性ややあり。

第77図 土坑47

- ①灰黄褐色土 (10YR5/2) しまり弱。粘性あり。径5mm以下の地山粒を少量、褐色土をしみ状に含む。
- ②黄褐色土 (10YR5/8) しまりあり。粘性やや強。
- ③黄褐色土 (10YR5/6) しまり強。粘性強。明黄褐色ローム (10YR6/6) を多く含む。

第78図 土坑48

表11 時期不明土坑一覧

遺構名	グリッド	平面形	規模 (長辺×短辺) (cm)	深さ (cm)	底面規模 (cm)	備考
土坑43	O3	円	137	67	107~115	近世~近現代の墓か
土坑44	J2	円	131~160	31	70~83	-
土坑45	C2	不整	91~159	71	54~75	-
土坑46	D3	円	208~211	36	149~154	-
土坑47	H8	円	95~100	12	60~62	-
土坑48	Z8	円	95~106	129	55~57	-

る。検出面からの深さは最大0.36mを測る。7層の褐色系埋土の堆積を確認した。

遺物は出土しておらず、時期および性格は不明である。

土坑47(第77図 PL.31)

H 8 グリッドの北東側、標高51.0mの緩斜面に位置する。表土除去後、Ⅲ層上面で検出した。南側は調査区外となるため、完掘していないが、平面形は円形で、径は0.95~1.0mを測る。断面形は浅い皿状で、遺構上部は後世の攪乱により失われている。検出面からの深さは0.12mを測る。埋土は2層に分けられ、黄褐色土を主体とする。

遺物は出土しておらず、時期・性格ともに不明である。

土坑48(第78図 PL.31)

Z 8 グリッドの中央、標高50.9mの斜面に位置する。Ⅲ層上面で検出した。

平面形は円形で、径0.95~1.06mを測る。遺構上部は後世の攪乱により失われている。検出面からの深さは1.29mを測る。埋土は黄褐色を主体として3層確認した。

形態から落とし穴とも考えられるが、埋土が縄文時代の落とし穴にみられる黒色系でなく、遺物も出土していないため、時期・性格ともに不明である。

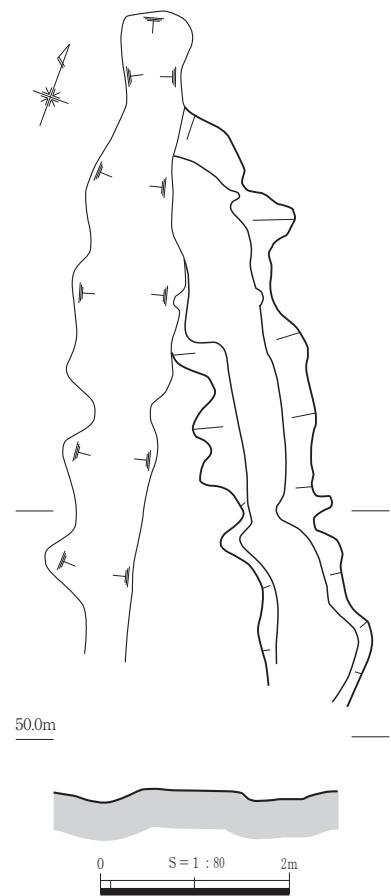
3 溝

溝 1 (第79図 PL.33)

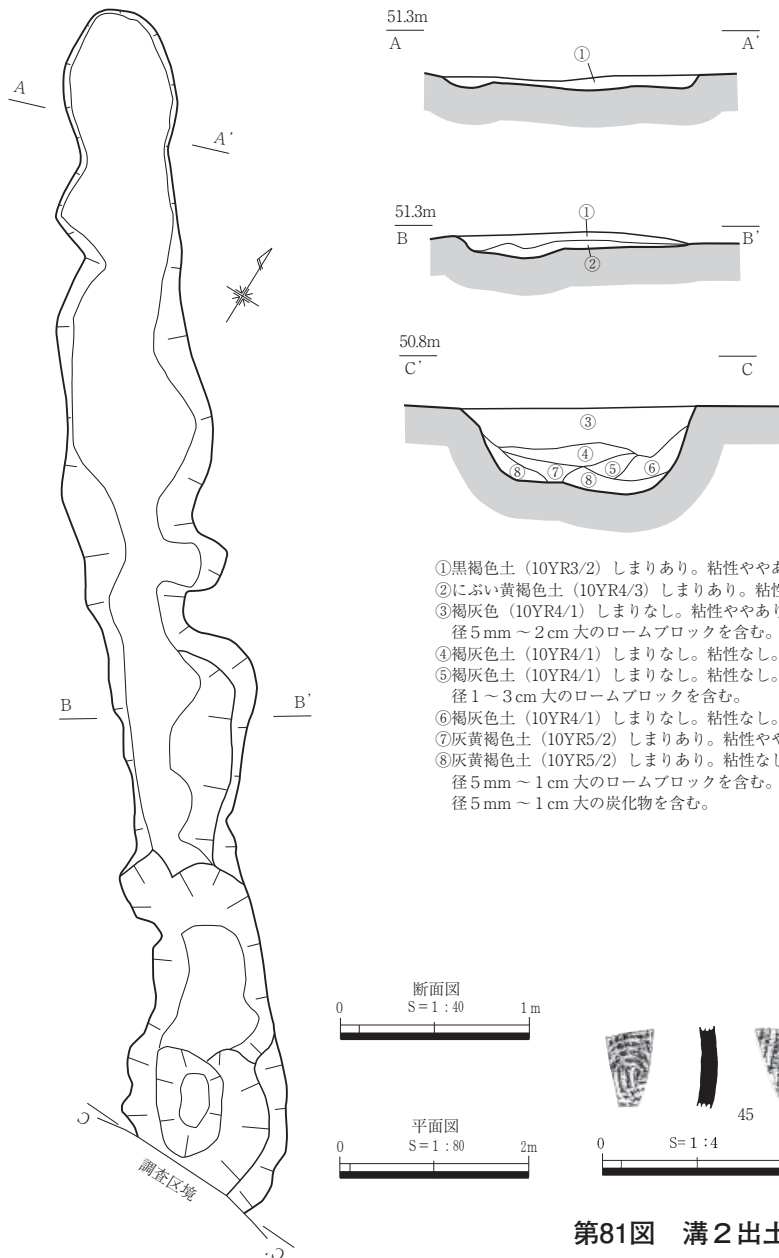
J 3 ~ I 4 グリッドに位置し、標高49.5mの地山上面で検出した。北西から南東方向に延びる溝である。北側が攪乱によって失われており、南側も溝の明確な端を検出することはできなかった。調査時に北側の攪乱と区別できずに掘削したため、埋土の詳細が明らかでないが、攪乱とは別に带状に延びており、底面も安定していることから溝と判断した。遺物は出土していない。

溝 2 (第80・81図 PL.33)

F 8 ~ G 7 グリッドにあたり、標高50.4~51.0mの緩斜面に位置する。南東方向から北西方向に延びる直線状の溝で、幅は1.3~1.6m、南東側が調査地外になるが、検出した長さは12.8mである。遺構上面は後世の攪乱により失われている。検出面から底面までの深さは最大で0.45mを測る。断面は逆台形状で、底面の標高は北西端で51.0m、中央で51.1m、南東調査区際で49.9mと南西方向に向かい緩やかに下る。埋土は6層に分けられ、褐灰色土を主体とし、ロームブロックが混入する。遺物は埋土中位から須恵器片(45)が出土した。溝の底面で遺物は出土していない。



第79図 溝 1



第80図 溝2

- ①黒褐色土 (10YR3/2) しまりあり。粘性ややあり。
- ②にぶい黄褐色土 (10YR4/3) しまりあり。粘性あり。
- ③褐灰色 (10YR4/1) しまりなし。粘性ややあり。
径5mm～2cm大のロームブロックを含む。
- ④褐灰色土 (10YR4/1) しまりなし。粘性なし。
- ⑤褐灰色土 (10YR4/1) しまりなし。粘性なし。
径1～3cm大のロームブロックを含む。
- ⑥褐灰色土 (10YR4/1) しまりなし。粘性なし。
- ⑦灰黄褐色土 (10YR5/2) しまりあり。粘性ややあり。
- ⑧灰黄褐色土 (10YR5/2) しまりあり。粘性なし。
径5mm～1cm大のロームブロックを含む。
径5mm～1cm大の炭化物を含む。

第81図 溝2出土遺物

遺構の時期は古墳時代中期以降であるが、詳細な時期および性格ともに不明である。

4 遺構外出土遺物

(図82・83 PL.38)

調査地内には本来堆積していたと推定される遺物包含層が削平によりほとんど残存していなかったため、遺構外から出土した遺物は限られており、わずかに土器・石器が出土している。

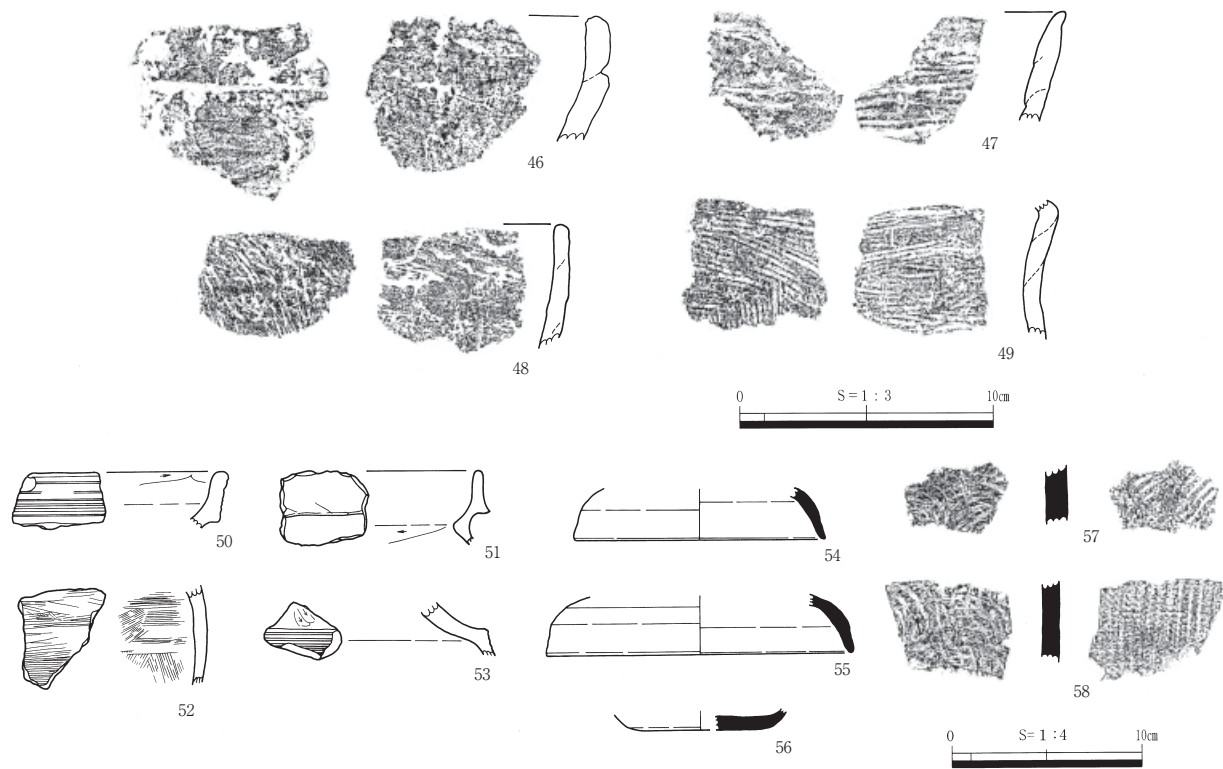
46～49は縄文土器である。46は鉢であり、外面に粘土を継いだ痕跡が段となってはっきりと認められる。内外面ともナデによって調整しているが、全体に粗雑である。47～49は深鉢である。47は口縁端部がやや外反し、内外面ともに貝殻条痕による調整がなされる。内面に粘土を継いだ痕跡が段になって認められる。48は内外面に植物条痕

による調整がなされる。口縁端部は調整がなされていない。49は内外面に貝殻条痕による調整がなされる。破損しているが口縁が内湾することが分かる。47～49とも縄文後晩期の粗製土器である。

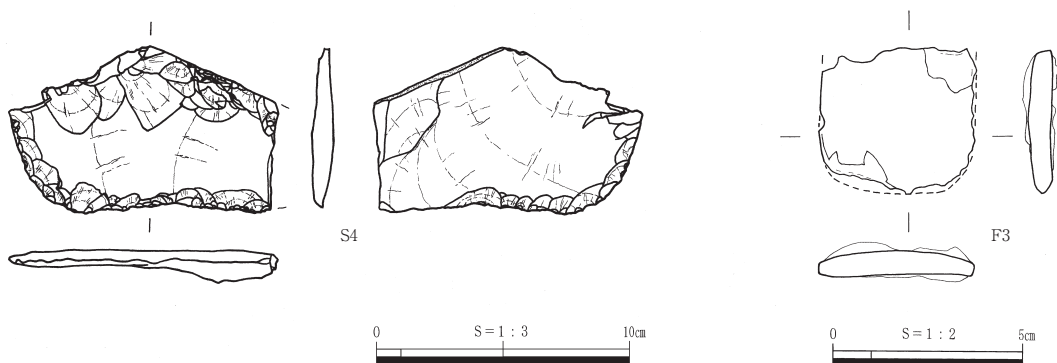
弥生土器は4点を図化した。50・51は甕の口縁部、52は体部片、53は高坏または器台の脚台部である。50・53はいずれも平行沈線文を施す。いずれも形状から概ね弥生時代後期中葉(V-2様式)の所産である。

54～58は須恵器である。形状の明らかなものは54・55の蓋である。端部の形状から、古墳時代後期の所産である。56は坏底部、57・58は壺甕類の体部片である。いずれも表土および攪乱土中からの出土である。

S4は安山岩製のスクレイパーである。F3は遺構検出中に1区の東側のⅢ層上面で出土した。鍛造の袋状鉄斧の先端部とみられる。銹化が著しく、遺存状態はよくない。時期を特定することは難しい。



第82図 遺構外出土遺物(土器)



第83図 遺構外出土遺物(石器・鉄器)

表12 出土土器・土製品観察表(1)

遺物番号	取上番号	遺構名 層位名	挿図 PL	種類 器種	法量 (cm)	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	195	土坑5 埋土中	14 38	縄文土器 深鉢	器高: △ 5.7	外面: ケズリのちナデ。 内面: ナデ。	密(砂粒有)	良	内外面: 黄橙色	
2	198	土坑5 埋土中	14 38	縄文土器 深鉢	器高: △ 3.5	内外面: ナデ。	密(1~2mmの 石英・砂粒を 含む)	良	内面: 褐色 外面: 明黄褐色	
3	20	土坑23 埋土中	33 38	縄文土器 深鉢	器高: △ 4.8	外面: 貝殻条痕。 内面: ナデのち貝殻条痕。	5mm大の長石粒 を多く含む	良	内外面: 浅黄褐色	
4	10	土坑28 埋土中	39 38	縄文土器 深鉢	器高: △ 4.0	外面: 貼り付け隆帯、刺突文。 内面: ナデ。	密(石英・長 石を多く含む)	良	内外面: 橙色	外面著しく風化
5	8・23・ 28・35・ 38	堅穴住居跡1 埋土中	53 34	弥生土器 壺	口径: ※ 19.4 器高: △ 18.5 最大胴径: ※ 25.3	外面: 口縁部~頸部ナデ。胴部ミガキ。口縁 部に9条の平行沈線文平行沈線文。 内面: 口縁部~頸部ナデ。胴部ケズリ。	密(1mm以下の 白色砂粒を多 く含む)	良	内外面: 橙色	
6	8・44・ 65	堅穴住居跡1 埋土中	53 35	弥生土器 壺	口径: ※ 16.0 器高: △ 9.3	外面: 口縁部~頸部ナデ。胴部ミガキ。口縁 部に8条の平行沈線文。 内面: 口縁部~頸部ナデ。胴部ケズリ。	密(1mm以下の 白色砂粒を多 く含む)	良	内外面: 橙色	
7	39	堅穴住居跡1 埋土中	53 34	弥生土器 小型壺	口径: ※ 10.9 器高: △ 6.3	外面: 口縁部~胴部ミガキ。 内面: 口縁部~頸部ナデ。胴部ケズリ。	密(1mm以下の 白色砂粒を多 く含む)	良	内外面: 灰褐色	
8	50・53	堅穴住居跡1 埋土中	53 34	弥生土器 甕	口径: ※ 10.6 器高: △ 12.0 最大胴径: ※ 13.5	外面: 口縁部~頸部ナデ。胴部ハケ。口縁部 に8条の平行沈線文。胴部上位に板状 工具による列点文。 内面: 口縁部~頸部ナデ。胴部ケズリ。	密(1~2mm程 の白色砂粒を 多く含む)	良	内外面: 淡黄色	
9	8・26・ 42・60	堅穴住居跡1 埋土中	53 35	弥生土器 甕	口径: ※ 17.4 器高: △ 12.7	外面: 口縁部~頸部ナデ。胴部ハケ。口縁 部に8条の平行沈線文。頸部界に8 条以上の波状沈線文(貝殻腹縁か)。 内面: 口縁部ナデ。頸部~頸部ケズリ。胴 部ケズリ後ナデ。	密(1~2mm程 の白色砂粒を 多く含む)	良	内外面: 橙色	
10	30	堅穴住居跡1 埋土中	53 34	弥生土器 甕	口径: ※ 11.6 器高: △ 7.3	外面: 口縁部~頸部ナデ。口縁部に10条の平 行沈線文。頸部界に3条以上の波状 沈線文。 内面: 口縁部ナデ。頸部~頸部ケズリ。	密(1~2mmの 白色砂粒を多 く含む)	良	内外面: 淡黄色	
11	8・24・ 34・41	堅穴住居跡1 埋土中	53 35	弥生土器 甕	口径: ※ 15.4 器高: △ 6.2	外面: 口縁部~頸部ナデ。胴部ミガキ。口縁 部に8条の平行沈線文。頸部界に8 条の波状沈線文。 内面: 口縁部ナデ。頸部~頸部ケズリ。	密(1mm以下の 白色砂粒を多 く含む)	良	内外面: 黄褐~ にぶい黄 褐色	
12	65	堅穴住居跡1 埋土中	53 34	弥生土器 甕	口径: ※ 19.0 器高: △ 6.0	外面: 口縁部~頸部ナデ。胴部ミガキ。口縁 部に2条以上の平行沈線文。頸部界 に8条以上の平行沈線文。 内面: 口縁部ミガキ。頸部~頸部ケズリ。	密(1mm以下の 白色砂粒を多 く含む)	良	内外面: 橙色	
13	8・37	堅穴住居跡1 埋土中	53 35	弥生土器 甕	口径: ※ 10.6 器高: △ 12.0	外面: 口縁部~頸部ナデ。口縁部に1条以 上の平行沈線文。頸部界に3条以上 の平行沈線文。 内面: 口縁部ナデ。頸部~頸部ケズリ。	密(1mm以下の 白色砂粒を多 く含む)	良	内外面: 橙色	
14	8	堅穴住居跡1 埋土中	53 34	弥生土器 甕	頸部径: ※ 10.2 器高: △ 7.1	外面: 口縁部~頸部ナデ。胴部ミガキ。口縁 部に16条以上の波状沈線文(貝殻腹 縁か)。 内面: 口縁部ナデ。頸部~頸部ケズリ後ミ ガキ。	密(1mm以下の 白色砂粒を多 く含む)	良	外面: 灰色 内面: 黄褐~ 褐色	
15	29	堅穴住居跡1 埋土中	53 35	弥生土器 甕	口径: ※ 13.6 器高: △ 10.9 最大径: △ 14.9	外面: ナデ。頸部界に16条以上の波状沈線 文(貝殻腹縁か)。 内面: 口縁部ナデ。頸部~頸部ケズリ。	密(1~2mm程 の白色砂粒を 多く含む)	良	外面: にぶい黄橙 ~ 褐色 内面: 橙色	
16	9	堅穴住居跡1 埋土中	53 34	弥生土器 甕	口径: ※ 19.0 器高: △ 4.5	外面: 口縁部~頸部ナデ。口縁部に14条以上 の平行沈線文。 内面: 口縁部ナデ。頸部ハケ。	密(1mm以下の 白色砂粒を多 く含む)	良	内外面: 浅黄色	
17	8	堅穴住居跡1 埋土中	53 34	弥生土器 甕	口径: ※ 16.4 器高: △ 4.6	外面: 口縁部~頸部ナデ。 内面: 口縁部ミガキ。頸部ケズリ。	密(1mm以下の 白色砂粒を多 く含む)	良	内外面: 橙色	
18	54・55 ・60	堅穴住居跡1 埋土中	53 34	弥生土器 甕	口径: ※ 16.4 器高: △ 7.8	外面: 口縁部~頸部ナデ。頸部ハケ。 内面: 口縁部~頸部ナデ。頸部ケズリ。	密(1mm以下の 白色砂粒を多 く含む)	良	内外面: 橙色	
19	60	堅穴住居跡1 埋土中	53 34	弥生土器 甕	口径: ※ 13.6 器高: △ 4.9	外面: 口縁部ミガキ。頸部ナデ。頸部界に板 状工具による列点文。 内面: 口縁部ミガキ。頸部ケズリ。	密(1mm以下の 白色砂粒を多 く含む)	良	内外面: 明黄褐色	
20	40	堅穴住居跡1 埋土中	53 -	弥生土器 壺	器高: △ 7.0 底径: ※ 6.0	外面: 底縁部ハケ後ナデ。底ケズリ後ナデ。 内面: ケズリ。	密(1mm以下の 白色砂粒を多 く含む)	良	内外面: にぶい黄 褐色	
21	8・11	堅穴住居跡1 埋土中	53 -	弥生土器 甕	器高: △ 1.6 底径: ※ 4.0	内外面: ナデ。	密(1mm以下の 白色砂粒を多 く含む)	良	内外面: にぶい橙 色	
22	47	堅穴住居跡1 埋土中	53 35	弥生土器 甕	器高: △ 9.5 底径: ※ 3.4	外面: ハケ後一部ミガキ。 内面: ケズリ。	密(1mm以下の 白色砂粒を多 く含む)	良	外面: にぶい橙色 内面: 橙色	
23	11・60	堅穴住居跡1 埋土中	53 34	弥生土器 鉢	口径: ※ 12.4 器高: △ 4.3	内外面: ミガキ。	密(1mm以下の 白色砂粒を多 く含む)	良	内外面: 灰褐色	
24	63	堅穴住居跡1 P2	53 34	弥生土器 甕	口径: ※ 14.7 器高: △ 2.5	外面: ナデ。 内面: 口縁部ナデ。頸部ケズリ。	密(1mm以下の 白色砂粒を多 く含む)	良	外面: にぶい黄橙 色 内面: 浅黄褐色	
25	6	堅穴住居跡2 埋土中	56 36	弥生土器 甕	口径: ※ 11.4 器高: △ 3.5	外面: ナデ。口縁部に6条の平行沈線文。 内面: 口縁部ナデ。頸部ケズリ。	密(1mm以下の 白色砂粒を多 く含む)	良	内外面: 橙色	
26	6	堅穴住居跡2 埋土中	56 36	弥生土器 甕	口径: ※ 12.8 器高: △ 4.4	外面: 口縁部ナデ。頸部ミガキ。口縁部に貝 殻腹縁による11条の平行沈線文。頸部 に貝殻腹縁による5条以上の波状沈 線文。 内面: 口縁部ナデ。頸部ケズリ。	密(1mm以下の 白色砂粒を多 く含む)	良	内外面: にぶい黄 褐色	
27	6	堅穴住居跡2 埋土中	56 36	弥生土器 甕	口径: ※ 16.0 器高: △ 3.9	外面: ナデ。口縁部に6条の平行沈線文。 内面: ナデ。	密(1mm以下の 白色砂粒を多 く含む)	良	内外面: にぶい褐 色	
28	14・15	堅穴住居跡2 埋土中	56 36	弥生土器 甕	頸部径: ※ 19.0 器高: △ 6.0	外面: 口縁部~頸部ナデ。胴部ミガキ。口縁 部に2条以上の平行沈線文。頸部界 に8条以上の平行沈線文。 内面: 口縁部ミガキ。頸部~頸部ケズリ後 ミガキ。	密(1mm以下の 白色砂粒を多 く含む)	良	外面: 明褐灰~橙 色 内面: にぶい黄橙 ~ 灰黄褐色	

表13 出土土器・土製品観察表(2)

遺物番号	取上番号	遺構名 層位名	挿図 PL	種類 器種	法量 (cm)	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
29	6・16・ 17・20	竪穴住居跡2 埋土中	56 36	弥生土器 甕	口径：※14.8 器高：△8.0	外面：口縁部～頸部ナデ。胴部ミガキ。口縁部に8条の平行沈線文。頸部界に2条計8条の平行沈線文。 内面：口縁部ミガキ。頸部～頸胴部ケズリ後ミガキ。	密(1mm以下の白色砂粒を多く含む)	良	外面：明褐灰～橙色 内面：にぶい黄橙～灰黄褐色	
30	13	竪穴住居跡2 埋土中	56 36	弥生土器 甕	口径：※14.4 器高：△3.6	外面：口縁部ナデ。頸部ミガキ。口縁部に半截竹管による3条の波状沈線文。 内面：口縁部ミガキ。頸部ケズリ。	密(1mm以下の白色砂粒を多く含む)	良	内外面：にぶい黄褐色	
31	6・20	竪穴住居跡2 埋土中	56 36	弥生土器 甕	口径：※13.0 器高：△3.5	外面：口縁部～頸部ミガキ。頸部下位ナデ。 内面：口縁部ミガキ。頸部ケズリ。	密(1mm以下の白色砂粒を多く含む)	良	内外面：明黄褐色	
32	20	竪穴住居跡2 埋土中	56 36	弥生土器 壺	器高：△1.3	外面：ミガキ。 内面：ミガキ。	密(1mm以下の白色砂粒を多く含む)	良	内外面：橙色	赤色塗彩
33	20	竪穴住居跡2 埋土中	56 36	弥生土器 鉢	口径：※8.8 器高：△4.5	外面：ミガキ。 内面：ケズリ後ナデ。	密(1mm以下の白色砂粒を多く含む)	良	外面：橙色 内面：にぶい褐色	
34	6	竪穴住居跡2 埋土中	56 35	弥生土器 小型蓋	器高：△1.8 裾径：※3.8	外面：ナデ。 内面：ナデ。	密(1mm以下の白色砂粒を多く含む)	良	内外面：にぶい橙色	
35	6	竪穴住居跡2 埋土中	56 36	縄文土器 深鉢	器高：△3.7	外面：ナデ。口縁端部に刻目。 内面：ナデ。	やや密(1～2mmの白色砂粒を多く含む)	やや良	内外面：灰褐色	羽島下層Ⅱ式
36	74	竪穴住居跡3 東へ下層	60 36	弥生土器 壺	口径：※11.6 器高：△5.7	外面：口縁部～頸部ナデ。口縁部に12条の平行沈線文。 内面：口縁部ナデ。頸部ケズリ。	密(1～3mm程の長石を多く含む)	良	内外面：にぶい黄褐色	
37	75・90	竪穴住居跡3 東へ下層 南床面上	60 36	弥生土器 甕	口径：※15.2 器高：△4.3	外面：口縁部～頸部ナデ。口縁部に4条の平行沈線文。 内面：口縁部ナデ。一部横方向の板状工具痕。頸部ケズリ。	やや密	良	内外面：橙色	
38	96	竪穴住居跡3 P2 検出面上	60 36	弥生土器 底部	器高：△2.0 底径：※4.8	外面：縦方向のミガキ。 内面：ケズリ。	密(0.1～0.3mm程の石英・砂粒を含む)	良	外面：灰褐色 内面：灰黄褐色	
39	56・ 144	竪穴住居跡3 南東検出面上 東床面上	60 36	弥生土器 底部	器高：△5.0 底径：※3.5	外面：ミガキ。煤付着。 内面：ケズリ。	密(1～2mm程の砂粒を多く含む)	良	外面：明赤褐色～褐色(一部黒色) 内面：黄褐色	
40	123・ 124・ 125・ 129・ 166	竪穴住居跡4 東床面上 東隅床面上	64 36	弥生土器 壺	器高：△3.4 口径：※18.2	外面：口縁部に5条の平行沈線文後ヨコナデ。頸部ヨコナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。	密(長石・石英・黒閃石を多く含む)	良	内外面：にぶい黄褐色	
41	27・71・ 122・ 126・ 127・ 164	竪穴住居跡4 北東下層 東へ上層 東床面上 東隅床面上	64 37	弥生土器 甕	口径：※14.7 器高：△21.4 底径：3.0	外面：口縁部に平行沈線文6条、頸部4条単位の波状文。 内面：底部上方向、体部上位～区部部横方向のケズリ。	密(1mm程の石英を多く含む)	良	内外面：浅黄褐色	
42	15・60	竪穴住居跡4 北西上層	64 36	弥生土器 甕	口径：※13.6 器高：△2.9	外面：剥落のため調整不明瞭。 内面：口縁部ナデ。	やや粗(1～2mm程の砂粒を含む)	良	内外面：明黄褐色	
43	165	竪穴住居跡4 東隅床面上	64 36	弥生土器 底部	器高：△1.3 底径：※4.4	外面：ナデ。ハケ目か。 内面：ナデ。	密(0.1～0.2mm程の石英・長石を多く含む)	良	外面：にぶい褐色～褐色 内面：にぶい黄褐色	外面に煤付着
44	12	土坑41 埋土中	67 37	土玉	最大径：3.6 孔径：0.9	-	密(0.1～0.2mm程の石英・砂粒を含む)	良	にぶい褐色	重量 44.0 g
45	189	溝2 埋土中	81 38	須恵器 体部	器高：△4.3	外面：平行タタキ。 内面：同心円状の当て具痕。	密	良	内面：灰色 外面：灰オリーブ色	
46	8	B37'リット F-F'⑧層	82 38	縄文土器 深鉢	器高：△5.0	内外面：ナデ。	粗(6mm以下の砂礫を多く含む)	良	内外面：浅黄色	明瞭な粘土つき痕粗雑
47	11	倒木痕	82 38	縄文土器 深鉢	器高：△4.4	内外面：貝殻条痕。	密(石英・長石を含む)	良	内外面：浅黄褐色	明瞭な粘土つき痕口縁外反
48	40	B57'リット	82 38	縄文土器 深鉢	器高：△4.9	内外面：植物条痕。	密(4mm以下の砂礫を含む)	良	内外面：浅黄色	口縁端部調整なし
49	7	B37'リット F-F'⑧層	82 38	縄文土器 深鉢	器高：△5.4	内外面：貝殻条痕。	密(1～2mmの砂粒を含む)	良	内外面：明黄褐色	口縁内傾
50	197	3区北 黒褐色土	82 38	弥生土器 甕	器高：△3.0	外面：口縁部に5条の平行沈線文 内面：口縁部ケズリ後ナデ。	密(1～2mmの砂粒を含む)	良	内外面：橙色	
51	205	A87'リット	82 38	弥生土器 甕	器高：△3.9	外面：口縁部ヨコナデ。 内面：口縁部ヨコナデ、径部ケズリ。	やや粗(1～2mmの砂粒を多く含む)	良	内外面：明黄褐色	
52	185	G87'リット 黒褐色土	82 38	弥生土器 甕	器高：△5.3	外面：横位のハケ目。 内面：縦・横位のハケ目。	密(1～3mm程の砂礫を多く含む、礫を含む)	良	内面：黄褐色 外面：明黄褐色	
53	199	K17'リット 黒褐色土	82 38	弥生土器 甕	器高：△3.6	外面：5条以上の平行沈線文。 内面：ケズリ後ナデ。	密(石英・砂粒を含む)	良	内外面：明黄褐色	
54	156	A77'リット 暗褐色土	82 38	須恵器 環蓋	口径：※13.0 器高：△2.7	外面：回転ヨコナデ。 内面：口縁部回転ヨコナデ。天井部にかけて回転ヨコナデ後ナデ。	密(0.5～1mm程の砂粒を含む)	良	内外面：灰色	
55	174	4区東 攪乱	82 38	須恵器 環蓋	口径：※16.1 器高：△3.1	外面：口縁部回転ヨコナデ。天井部回転ケズリ後ナデ。 内面：回転ヨコナデ。	密(0.1mm程の長石を含む)	良	外面：青灰～灰オリーブ黒色 内面：青灰色	
56	184	G57'リット 攪乱	82 38	須恵器 環	器高：△1.0 底径：※6.2	外面：底面は工具によるナデ。立ち上がり部回転ヨコナデ。 内面：ナデ。	密	良	内外面：灰色	
57	187	G87'リット 攪乱	82 38	須恵器 体部	器高：△3.1	外面：平行タタキ。 内面：同心円状の当て具痕。	密	良	内面：灰色 外面：オリーブ黒色	
58	202	F77'リット 表土	82 38	須恵器 体部	器高：△4.3	外面：平行タタキ。 内面：同心円状の当て具。	密	良	内面：暗青灰色 外面：暗青灰色	

表14 出土石器観察表

遺物番号	取上番号	遺構名 層位名	挿図 PL	種類	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
S 1	59	竪穴住居跡1 埋土	53 35	台石	14.5	13.0	6.2	1870	
S 2	18	竪穴住居跡2 埋土	56 35	台石	12.2	10.9	4.5	970	一部被熱痕跡と煤付着。
S 3	149	竪穴住居跡3 床面直上	57 37	台石	44.3	35.7	14.2	3,350	
S 4	47	遺構外	83 38	スクレイパー	7.5	10.6	1.25	810	安山岩。

表15 出土鉄器観察表

遺物番号	取上番号	遺構名 層位名	挿図 PL	器種	法量 (cm)	形態・手法上の特徴	備考
F 1	62	竪穴住居跡1 埋土	53 37	鉄鎌	残存長 3.1 最大幅 3.2 最大厚 0.25	完存。中央付近に孔2箇所有。	基部中央に木質が付着する。 重量 4.260 g
F 2	19	竪穴住居跡2 埋土	56 37	鉈か	残存長 2.45 最大幅 1.3 最大厚 0.2	断面が緩いU字形状を呈し、薄いことから鉈の体部か。基部および先端部欠損。	重量 2.643 g
F 3	2	N 3ヶ'リット' Ⅲ層上面	83 37	板状鉄斧か	残存長 3.8 最大幅 4.1 最大厚 0.6	鉄斧の先端部。体部以下は欠損。刃部も剥落が著しい。	重量 30.509 g

第4章 自然科学分析の結果

放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

伊藤茂・尾寄大真・丹生越子・廣田正史・山形秀樹・小林紘一

Zaur Lomtadze・Ineza Jorjoliani・竹原弘展

1. はじめに

西伯郡大山町に位置する小竹上鷹ノ尾遺跡より検出された試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

2. 試料と方法

測定試料の情報、調製データは表1のとおりである。試料1（PLD-16937）は、円形で底面ピットのある落とし穴土坑5より出土した炭化材である。試料2（PLD-16938）は、円形の落とし穴土坑27より出土した複数個体の炭化材である。試料3（PLD-16939）は、長方形で底面ピットのある落とし穴土坑25より出土した炭化材である。試料4（PLD-16940）は、長方形の落とし穴土坑4より出土し

表16 測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-16937	試料1 遺構：土坑5（落とし穴、円形） 層位：底面ピット内	試料の種類：炭化材 試料の性状：不明 状態：wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:1.2N)
PLD-16938	試料2 遺構：土坑27（落とし穴、円形） 層位：最下層埋土	試料の種類：炭化材(複数個体) 試料の性状：不明 状態：wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:0.5N, 塩酸:1.2N)
PLD-16939	試料3 遺構：土坑25（落とし穴、長方形） 層位：底面ピット内	試料の種類：炭化材 試料の性状：不明 状態：wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:0.1N, 塩酸:1.2N)
PLD-16940	試料4 遺構：土坑4（落とし穴、長方形） 層位：最下層埋土	試料の種類：炭化材 試料の性状：不明 状態：wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:1.2N)

た炭化材である。なお、試料はいずれも最外年輪は確認されなかった。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製1.5SDH）を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

3. 結果

表2に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}C$ ）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した¹⁴C年代、¹⁴C年代を暦年代に較正した年代範囲を、図1に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

¹⁴C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代（yrBP）の算出には、

^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定 of 統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い (^{14}C の半減期 5730 ± 40 年) を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正には OxCal4.1 (較正曲線データ: Intcal09) を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2% 信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は 95.4% 信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

表17 放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (%)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
PLD-16937 試料 1	-23.26 ± 0.12	3432 ± 19	3430 ± 20	1754BC (29.8%) 1727BC 1722BC (38.4%) 1691BC	1870BC (6.6%) 1846BC 1809BC (0.5%) 1805BC 1776BC (88.3%) 1685BC
PLD-16938 試料 2	-25.04 ± 0.13	6082 ± 22	6080 ± 20	5026BC (68.2%) 4956BC	5056BC (95.4%) 4934BC
PLD-16939 試料 3	-25.03 ± 0.12	41860 ± 274	41860 ± 270	43599BC (68.2%) 43049BC	43881BC (95.4%) 42796BC
PLD-16940 試料 4	-23.56 ± 0.14	4185 ± 20	4185 ± 20	2877BC (13.6%) 2863BC 2807BC (48.2%) 2759BC 2717BC (6.4%) 2710BC	2885BC (20.5%) 2848BC 2814BC (55.6%) 2739BC 2730BC (18.0%) 2693BC 2688BC (1.3%) 2679BC

4. 考察

以下縄文時代の土器編年との対応関係については、小林謙一(2008)、小林達雄編(2008)を参照した。試料 1 (PLD-16937) は、 1σ 暦年代範囲で 1754-1727 cal BC (29.8%) および 1722-1691 cal BC (38.4%)、 2σ 暦年代範囲で 1870-1846 cal BC (6.6%)、1809-1805 cal BC (0.5%)、1776-1685 cal BC (88.3%) となった。これは縄文時代後期中葉にあたる。

試料 2 (PLD-16938) は、 1σ 暦年代範囲で 5026-4956 cal BC (68.2%)、 2σ 暦年代範囲で 5056-4934 cal BC (95.4%) となった。これは縄文時代早期末から前期初頭にあたる。

試料 3 (PLD-16939) は、 1σ 暦年代範囲で 43599-43049 cal BC (68.2%)、 2σ 暦年代範囲で 43881-42796 cal BC (95.4%) と縄文時代よりはるかに古い年代を示した。

試料 4 (PLD-16940) は、 1σ 暦年代範囲で 2877-2863 cal BC (13.6%)、2807-2759 cal BC (48.2%)、2717-2710 cal BC (6.4%)、 2σ 暦年代範囲で 2885-2848 cal BC (20.5%)、2814-2739 cal BC (55.6%)、2730-2693 cal BC (18.0%)、2688-2679 cal BC (1.3%) となった。これは縄文時代中期後葉にあたる。

試料 2 は 4 万年以上前ときわめて古い年代を示しており、遺構埋没時の再堆積によるものである可能性が考えられる。

参考文献

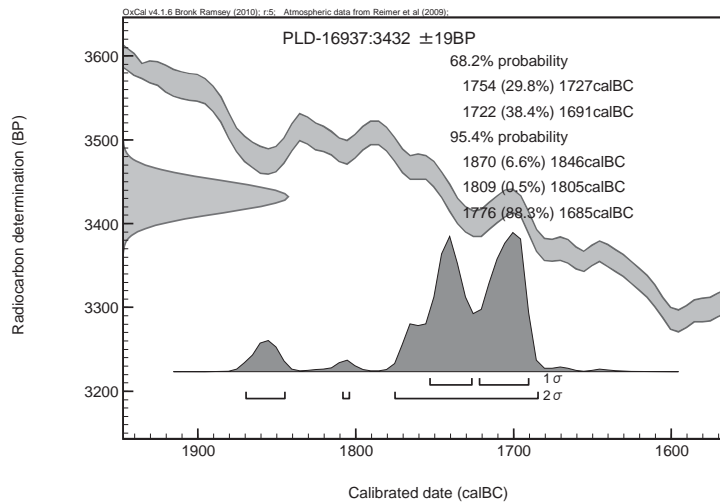
Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.

小林謙一 (2008) 縄文時代の暦年代. 小杉康・谷口康浩・西田泰民・水ノ江和同・矢野健一編「縄文時代の考古学2 歴史のものさし—縄文時代研究の編年体系—」: 257-269, 同成社.

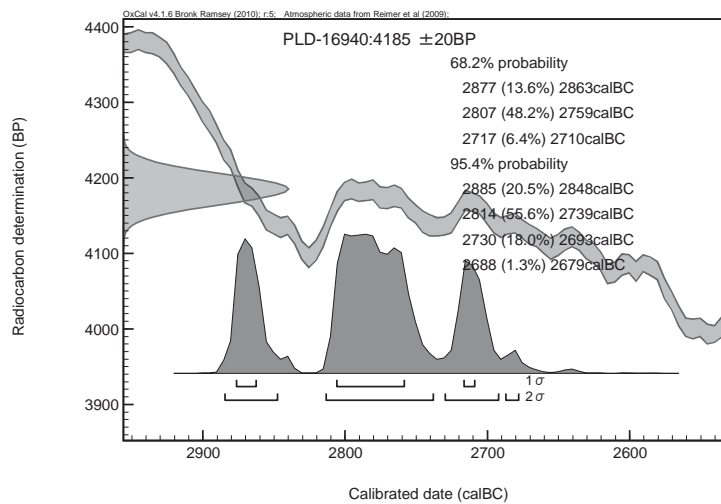
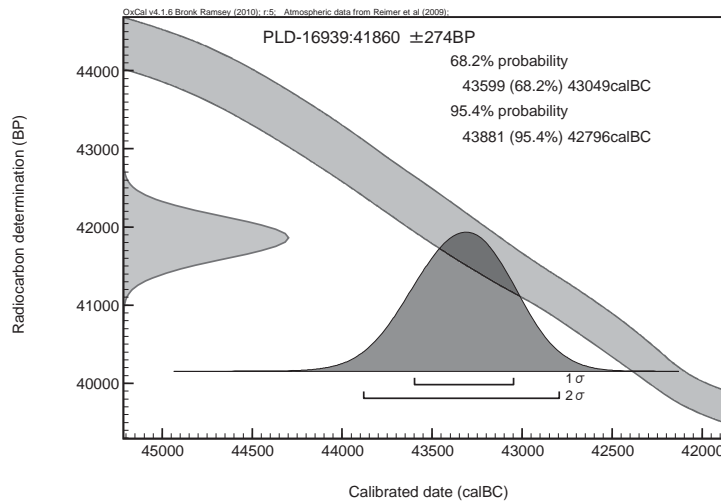
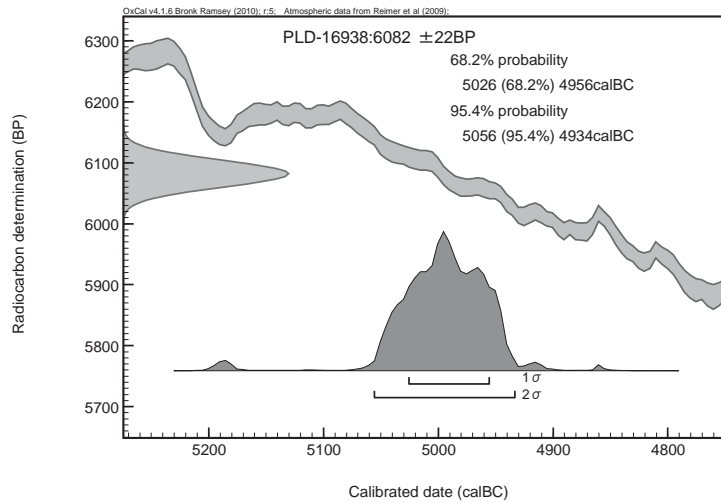
小林達雄編 (2008) 総覧縄文土器. 1322p, アム・プロモーション.

中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の¹⁴C年代編集委員会編「日本先史時代の¹⁴C年代」: 3-20, 日本第四紀学会.

Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Burr, G.S., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., McCormac, F.G., Manning, S.W., Reimer, R.W., Richards, D.A., Southon, J.R., Talamo, S., Turney, C.S.M., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer C.E. (2009) IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0–50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 51, 1111-1150.



第84図 暦年較正結果1 (試料1)



第85図 曆年較正結果2 (試料2~4)

第5章 総括

小竹上鷹ノ尾遺跡の調査では、縄文時代の落とし穴と弥生時代後期の竪穴住居跡が主な成果であり、他の時期についてはわずかな出土遺物がある程度で、遺跡の主体を成すのは縄文時代及び弥生時代の2時期にほぼ限られている。以下では、この2時期の成果について時期ごとに整理し、総括とする。

縄文時代

落とし穴を39基、貯蔵穴1基を確認した。調査地はほぼ全域にわたって削平されており、いわゆる地山層まで削平が及んでいた。このため、当時の遺構面はもとより、地山上面の地形も本来の姿をとどめておらず、落とし穴の本来の深さや平面形、立地を踏まえた検討には限界がある。このような制約を前提としたものであるが、当遺跡における落とし穴の様相を明らかにするため、ここではいくつかの視点で落とし穴について検討を行う。

落とし穴の分布は、大まかなまとまりとして、調査地の北西部、中央部、南東部の3つの群(以下、北西群・中央群・南東群と呼称)に分けることができる(第86図)。いずれも南西-北東方向へ帯状に分布している。当遺跡が南南東から北北西へ延びる丘陵上に位置していることを考えると、緩斜面の等高線に沿うように帯状に分布していたと推定する。

落とし穴の時期については、土坑出土炭化物の放射性炭素年代測定を行っている。その結果は、土坑27が早期末から前期初頭、土坑4が中期後葉、土坑5が後期中葉となっており、大きな時期差を示している。この3基は平面形、底面ピットの有無でそれぞれ異なる特徴を持っており、平面円形で底面ピットを伴わないもの(分析試料は土坑27)、平面円形で底面ピットを伴うもの(分析試料は土坑5)、平面方形のもの(分析試料は土坑4)に分類することができる。

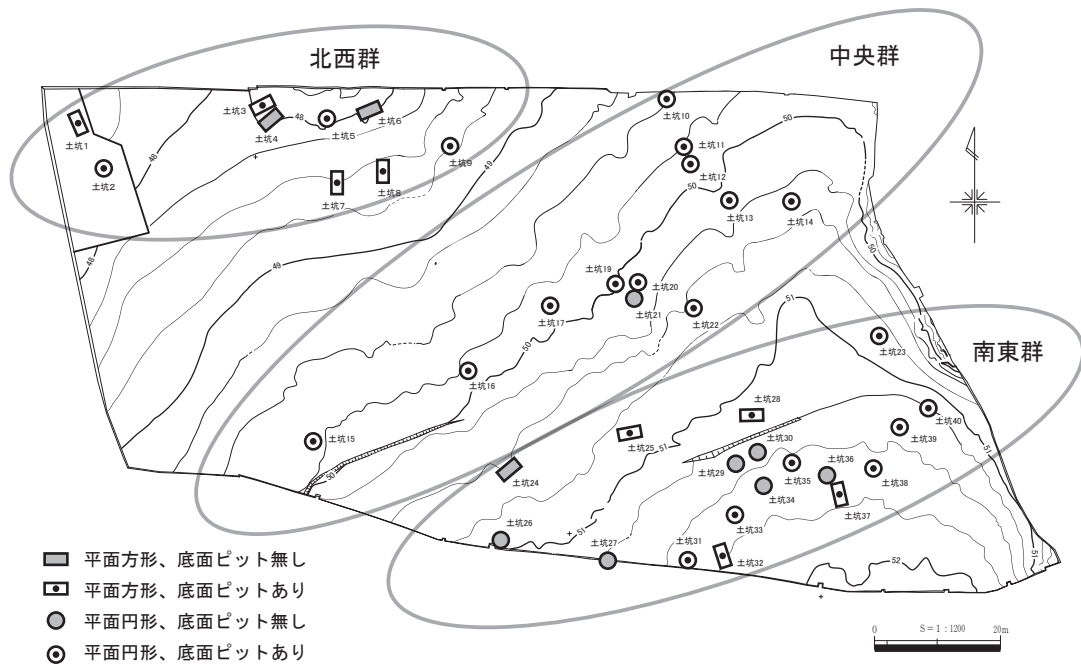
落とし穴の平面形及び底面ピットの有無による分布について検討すると、次のように整理することができる。平面円形のものはいずれの群にも分布しており、平面長方形のものは北西群および南東群に分布し、中央群には分布していない。また、底面ピットの有無については、平面円形で底面ピットのないものが南東群に目立っている。対象となる獲物の差、罝を仕掛けた人物の差など、罝を仕掛ける際の何らかの原理によっても落とし穴の形状や分布の変化が生じるため、本来、落とし穴にみられる異差をすべて時期差とすることはできないが、ここでは特徴の差が時期差を反映していると仮定し、時期ごとの分布状況を整理すると、以下の3段階が設定できる。

第1段階(早期末から前期初頭)：平面円形で底面ピットを伴わないものが主に南東群に分布する。

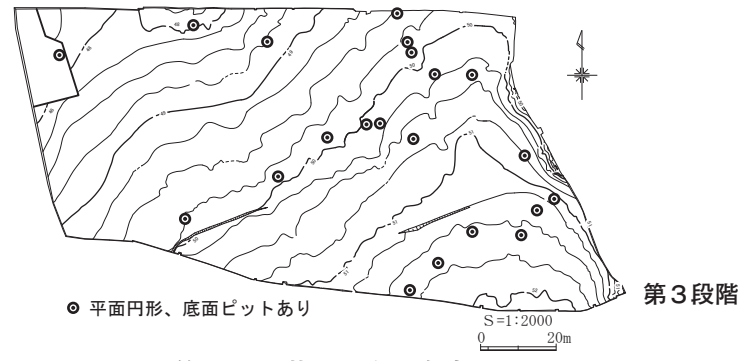
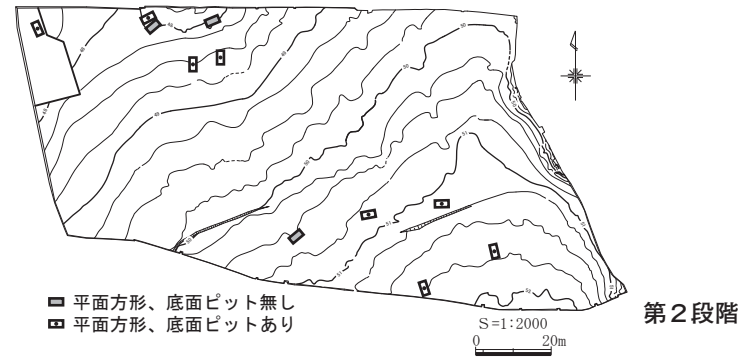
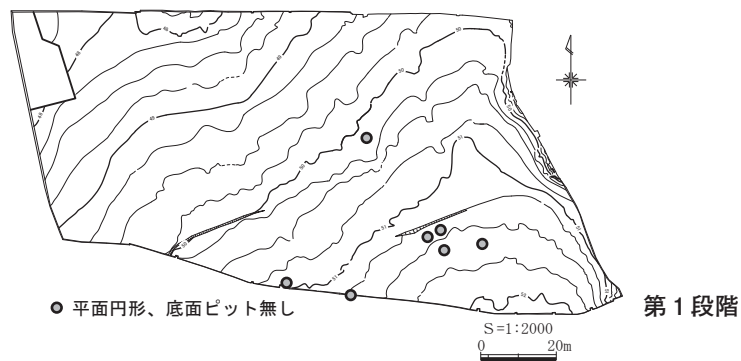
第2段階(中期後葉)：平面長方形で底面ピットを伴うものが主に南東群に分布する。平面方形で底面ピットを伴わないものもここに含めると、北西部にも分布範囲が及んでいる。

第3段階(後期中葉)：平面円形で底面ピットを伴うものが中央群を中心に北西群・南東群にも分布する。

以上のように、落とし穴の平面形および底面ピットの有無を時期差ととらえた場合、落とし穴の分布が調査地南東部から次第に北西方向へ広がっていったことがうかがえる。このように、当遺跡では縄文時代早期末から後期後葉まで、時期によって落とし穴の分布域を拡大させつつ、狩猟場として利



第86図 落とし穴の分布



第87図 落とし穴分布変遷図

総括

用されていたことがうかがえる。

弥生時代

竪穴住居跡4棟、貯蔵穴2基を検出し、弥生時代後期中葉から後葉まで営まれた集落の一部を確認することができた。ここでは集落の様相を述べるにあたり、周辺の同時代集落の様相と比較を行いつつ検討を行う。

大山山麓では近年、集落の調査例が増加しているが、小竹上鷹ノ尾遺跡周辺の弥生時代後期中葉から後葉にかけての集落について、全体像が分かるほどの広範囲で調査が行われている遺跡は少ない。位置的に近く、様相が明らかな遺跡としては、古御堂笹尾山遺跡の中の弥生後期の集落跡があげられる(第88図)。

小竹上鷹ノ尾遺跡の竪穴住居跡は、出土した土器から竪穴住居跡3と4が弥生時代後期中葉、竪穴住居跡1と2が後期後葉に廃絶しており、大きく2時期に分けることができる。同時期のそれぞれ2棟は同時併存したかどうか確定できないが、周囲に同時期の竪穴住居跡もなく、ここでは同時併存したと推定し、検討を行う。同時期の住居の間隔は約6mであり、古御堂笹尾山遺跡の十数mに比べると極端に狭い。住居に周堤が伴うことを考慮すると、隣接していたと考えられる。それぞれの竪穴住居跡は、小型の竪穴住居跡と、それより大型の竪穴住居跡が対になっている。

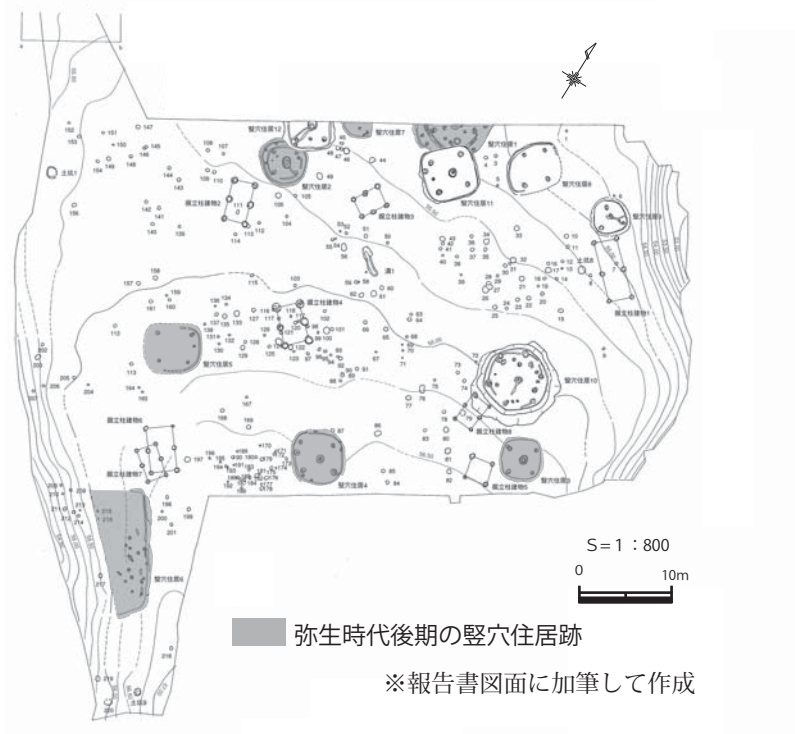
竪穴住居の構造は小型と大型で両時期を通じて共通点を持っており、小型の1棟が隅丸方形の4本柱、大型の1棟が円または六角形を呈している。また、大型の住居のみ拡張が行われている。さらに、大型の住居には中央ピットの周囲に削り出しの周堤を有するという共通点がある。この削り出しの周堤をもつ竪穴住居跡は古御堂笹尾山遺跡ではみられず、その他近隣の遺跡でも多くは周堤を持たないか、あるいは、逆に段状に掘り込まれる二段掘りの構造をもつ中央ピットが主体をなしており、当遺跡で継続的にみられることは特徴的である。

このほか、当遺跡ではいずれの竪穴住居跡も壁に羽目板を使用している点で共通している。

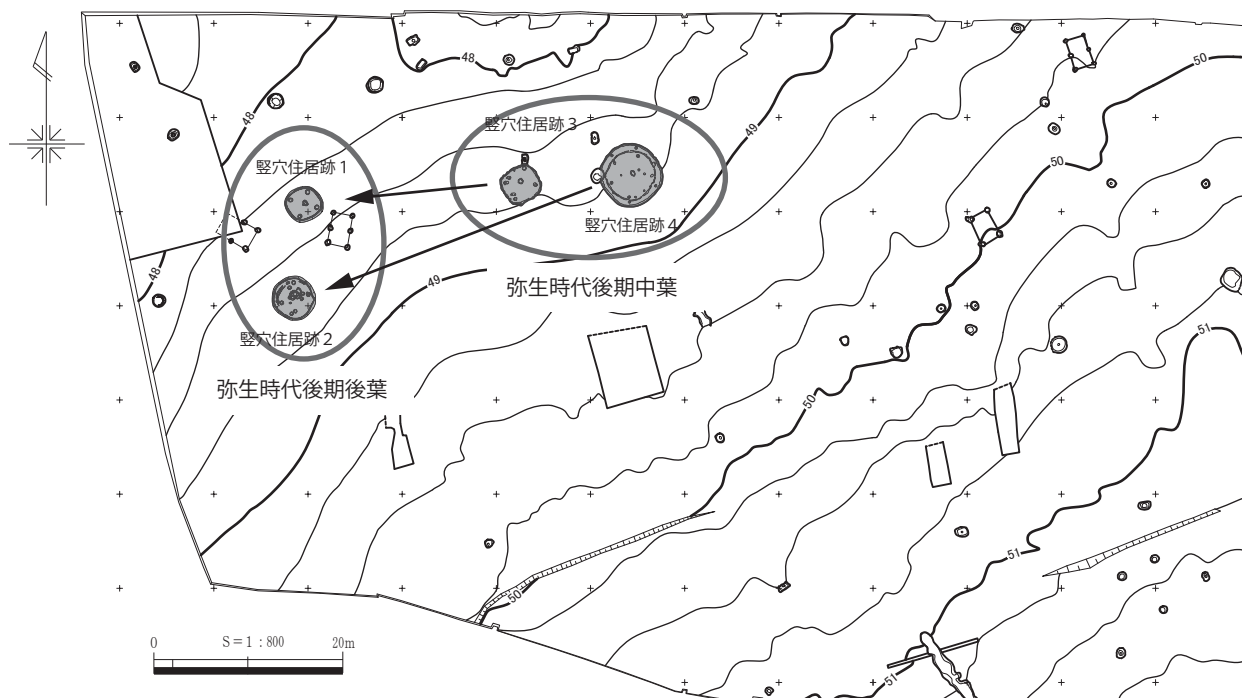
出土遺物については、台石、楕円礫、鉄族といった土器以外のものも出土している。竪穴住居跡3では、北西隅の柱の外に接して使用面を上にもつ台石が出土している。敲打の跡がはっきり残っており、繰り返し使用されたことがわかる。重量があり容易に移動はできなかったであろうから、竪穴住居内において使用されていた可能性が高いと考えている。具体的な用途は明らかでないが、竪穴住居跡3が何らかの作業空間として機能していたことをうかがわせる。なお、周辺の遺跡で据えられたままの台石が出土した例としては、退休寺遺跡第8竪穴住居跡がある。後期中葉の住居跡で、台石は住居北西隅の柱の掘り方の外縁部から出土している。

表18 竪穴住居跡1～4一覧

	竪穴住居跡1	竪穴住居跡2			竪穴住居跡3	竪穴住居跡4	
		(第1)	(第2)	(第3)		(古)	(新)
形状	隅丸方形	-	-	不整多角形	隅丸方形	円形	円形
規模 (m)	3.51×3.52	-	-	4.5×4.6	3.5×4.0	5.2~5.3	6.2~6.6
床面積 (㎡)	8.75	-	-	12.81	11.32	19.68	30.19
柱数	4	4	4	4	4	5	7
柱間 (m)	1.9~2.0	1.5~2.0	1.5~2.0	1.9~2.65	2.0~2.55	2.0~3.3	2.0~3.3
中央P	有・周堤無	有	有	有	有・周堤無	有・周堤有	
壁溝	有	有	有	有	羽目板	羽目板	有
羽目板	有	-	-	有	有	無	有
床面直上遺物	無	無	無	無	台石	無	礫群
時期	後期後葉	不明	不明	後期後葉	後期中葉	不明	後期中葉



第88図 古御堂笹尾山遺跡の遺構配置(弥生時代後期～古墳時代前期)



第89図 小竹上鷹ノ尾遺跡竪穴住居跡1～4の変遷

竪穴住居跡4では南東の柱穴の外側から楕円礫がまとまって出土している。使用痕は認められず、用途については判然としない。柱の際から棒状の礫群が出土した例としては、古墳時代前期初頭と時期が下るが、久蔵谷遺跡がある。両遺跡とも集められたようにまとまって出土しており、一括して保管していたような出土状況である。

以上のことから、小竹上鷹ノ尾遺跡の集落では、大小1棟ずつ組になった住居が継続的に営まれていたと考える(第89図)。住居跡は大小それぞれ異なった特徴を持っていることから、組になるそれぞれの住居に機能あるいは使い分けがあり、そのあり方が後期中葉から後期後葉にかけて継続していたと想定している。住居間の間隔が極端に狭い点で共通しているのも、組になる住居同士が互いに関連をもっていたことを反映している可能性もあろう。

これら竪穴住居跡の他には、南側や東側にもスペースがあるものの、竪穴住居跡は検出されなかった。調査地内は削平が著しいため、床面まで削平されたものも存在していた可能性を考えられるが、意識的に精査したものの住居跡に復元しうるピット等は全く検出していない。古御堂笹尾山遺跡では竪穴住居跡が十数mの間隔で、約40~50mの範囲に環状に分布しており、これと比べても当遺跡が集落としては小規模であったことがうかがえる。地形的に調査地西側は急斜面地となっているため、他に竪穴住居跡が広がっていたとしても、調査地外に少数が分布する程度であったと想定している。非常に近接して性格の異なる竪穴住居跡が位置を変えつつ継続してみられることを重視すれば、集落からやや離れた位置に、何らかの機能を与えられ意図的に配置されていた可能性もあるだろう。

引用・参考文献

- 財団法人鳥取県教育文化財団 2004『古御堂笹尾山遺跡 古御堂新林遺跡』鳥取県教育文化財団調査報告書93
- 財団法人鳥取県教育文化財団 2005『久蔵谷遺跡』鳥取県教育文化財団調査報告書97
- 中山町教育委員会 2005『退休寺遺跡 退休寺飛渡り遺跡』中山町文化財調査報告書第29集